

小学校音楽教育における読譜力育成カリキュラムの開発に向けて

竹内 由紀子

千葉大学・教育学部

Toward Curriculum Development of Score Reading Ability Development on Music Education in Elementary School

TAKEUCHI Yukiko

Faculty of Education, Chiba University

小学校の音楽科授業において、「楽しい活動」が重視されがちである。音楽を愛好する態度を養うための入り口として、「楽しい活動」を取り入れることは必要ではあるが、果たしてそれらの活動は芸術の音楽としての「楽しさ」であるだろうか。芸術としての音楽を経験させるためにも、段階的かつ継続的に音楽的な基礎知識や基礎能力を育て、より美しい音楽を追い求める感性を育む土台作りが必要だ。本紀要では、音楽的な基礎知識や基礎能力を育てるためのひとつの手段として読譜力育成に焦点を置き、現行の教科書の分析と、カリキュラム開発に向けた素案をまとめる。

キーワード：読譜力 (Score Reading Ability), ソルフエージュ (Solfege),
音楽科教育法 (Teaching method for Music Education)

Ⅰ. はじめに

1.

小学校での音楽の授業に対する認識において、「楽しい活動」をやらせることが音楽を愛好する態度を養うことに繋がると考えられている傾向があるように感じる。「小学校音楽科教育法」を受ける学生や、現場で指導している小学校教員に聞き取りをしてみると、「楽しく身体を動かす活動があるとよい」「音程は気にせず歌詞のイメージに合った歌唱をさせたい」等と、音楽が本来持っている美的感覚や非言語コミュニケーション等の本質的な芸術の部分には触れず、音楽を通してクラスを仲良くさせる、体ほぐしをする、等といった部分を大切にしたい(している)という声も少なくない。現場で行われている授業を参観しても、45分の少ない授業の大半を、音楽を使った単なるゲームの時間に費やしてしまったり、教師自身が活動の本来の意図をはっきりと理解できずにやらせてしまったりすることで、本来ならばリズム感や拍節感を育てられる活動が、ただの遊びになったりしてしまう、ということが見受けられた。

それらの活動について、全面的に否定したいわけではなく、活動の意図を理解し、適切な学年や時期に行ったり、的確な指導や助言を行ったりすることで、音楽的な基礎能力を高めるための一つ的手段として使うことは可能であると考えている。また、音楽を愛好する態度を育てるための入り口としても、「楽しい活動」は必要である。しかし、活動の意図を汲み取らず、「活動させやすいから」、

「子どもたちが楽しそうだから」、等の理由のみでやらせることがよくないと言える。音楽の授業で行う活動は、様々な研修や市販の書籍等でも数多く紹介されている。教員は学んだ活動や手法を取り入れ、授業を改善しようとするが、それぞれの活動がなんのためにあるのかをよく見極める必要がある。

2.

本紀要では、音楽的な基礎能力を養うための有効な教材や手法についてのカリキュラム開発について考えていく。まずは現行の教科書を分析し、音楽的な基礎知識を養う部分や読譜力を身に付けさせる部分を取り出す。音楽的な基礎能力を高めるために、読譜力が必要だと考えている。読譜力は、基礎的な楽典を学ぶことで養うことが出来る。音符の種類がわかる、音価がわかることでリズムが読めるようになる。音部記号を覚え、音名を理解することで階名唱が出来るようになる。リズムと音高の組み合わせが理解出来れば、旋律を階名で歌うことが出来るようになるはずだ。そこで、教科書教材としてなんの楽曲が扱われ、どのような力を身に付けさせるために、どんな工夫がされているかを調査したい。それらをまとめ、教員が教科書を扱う際に留意したい点を洗い出していく。

さらに、音楽的な基礎能力を高めるために必要な読譜力育成カリキュラムの素案を、千葉大学教育学部附属小学校で実際に行った活動や、「小学校音楽」の講義で行っている方法を元にまとめる。

II. 教科書教材の分析

1.

現行の教科書での楽典に関する学習を取り出してまとめ。教育芸術社と教育出版社（どちらも平成27年度検定）の小学校の教科書を調査した。

1) 1年生

教育芸術社	教育出版社
・「さんぽ」(中川季枝子作詞・久石譲作曲)に合わせ手拍子や足踏みをする(拍) ・拍に合わせ、返事をしたり3文字の言葉を唱えたりする(拍の定着) ・「じゃんけんぽん」(芙龍明子作詞・橋本祥路作曲)の歌に合わせ、2拍子2小節分のリズム打ちをする(4分音符・4分休符) ・「みんなであそぼう」(長井理香作詞・長谷部匡俊作曲)の歌詞に合わせ、2拍子4小節分のリズム打ちをする(4分音符・4分休符の長いリズム) ・「しろくまのジェンカ」(平井多美子日本語詞・ケンウォール作曲)に合わせ、間に休符が入ったリズムを打つ(間に4分休符) ・「ぶんぶんぶん」(村野四郎日本語詞・ボヘミア民謡)の歌詞と同じリズムを打つ(8分音符・拍の分割) ・三文字と五文字の言葉を唱える(リズムづくりでの定着) ・鍵盤ハーモニカの導入(音価・音高の仕組み) ・「どんぐりさんのおうち」(久野静夫作詞・市川都志春作曲)で、鍵盤の位置を理解する(ドとソの位置・黒鍵の配置) ・同曲を階名唱する(音高)	・「サンダーバード」(グレイ作曲)「ピンク・パンサーのテーマ」(マンシーニ)「どうけしのギャロップ」(カバレフスキー作曲)に合わせ足踏みや手拍子を含めた身体表現をする(拍) ・「おちゃらか」(わらべうた)「なべなべ」(わらべうた)の手遊びをする(拍) ・「ぶんぶんぶん」(村野四郎作詞・ボヘミア民謡)でリズム打ちや手合わせをする(4分音符・4分休符) ・たん(4分音符)とうん(4分休符)の組み合わせのリズムをつくる(リズムづくりでの定着) ・「しろくまのジェンカ」(平井多美子作詞・ウォール作曲)に合わせ、間に休符が入ったリズムを打つ(リズムの反復) ・「わくわくキッチン」(日向有作詞・作曲)の歌詞に合わせ、リズム打ちする(拍の分割・8分音符) ・「ドレミの歌」(ベギー葉山作詞・ロジャーズ作曲)でドレミ体操をする(音高を身体で捉える) ・どれみのキャンディー(佐甲慎作詞・作曲)の歌詞に合わせ、ドレミ体操する(音高の定着) ・鍵盤ハーモニカの導入(黒鍵の位置・音価の仕組み) ・「ひのまる」(高野辰之作詞・岡野貞一作曲)で階名唱する(音高) ・たん(4分音符)、たた(8分音符)、うん(4分休符)を組み合わせでリズムを作る(4分音符・8分音符・4分休符の定着)

1年生の教科書を比較してみると、どちらの教科書もまずは身体表現をしながら拍を取る活動からスタートする。これは、子どもたちが生活や遊びの中で自然と拍を取るという行為をしているということを、子どもたち自身に気付かせることで、拍の学習につなげていると考えられる。その後、拍に合わせて手拍子をしたり、休符

を感じたりする活動が続く。まずはひとつの拍に対してひとつの手打ち(たん)、または休み(うん)、という単純なリズムを繰り返す。さらに、拍を分割したリズム(たた)が加わる。教科書に提示されているリズムをそのまま手打ちする活動は、どちらの教科書でも充実されているが、定着させる方法で教科書ごとの相違点があった。教育芸術社は手打ちのリズムを言葉で唱え、生活に密着させていることに対し、教育出版社の方は自分でつくって振り返るという方法を使っている。いずれにせよ、単純なリズムに特化し、拍の流れに乗る活動を多くすることにより、音楽の基本的な「拍」の感覚を身に付けさせることができると考える。

教科書の後半では鍵盤ハーモニカの学習がスタートし、音高や音価についての仕組みについて、実感を伴って気付けるようになる。鍵盤ハーモニカの演奏のための、ドレミで歌う階名唱も始まる。着目すべき点は鍵盤ハーモニカの学習における記譜の仕方だ。五線やト音記号を使わず、三本の線と符頭のみ使い、さらに符頭の中に階名を記した簡易的な楽譜を使用している。指替えをしなくても演奏出来る1点ハ〜1点トの旋律を、簡易な楽譜を見ながら演奏する体験をすることで、読譜への抵抗を少なくしていると感じられる。さらに、記譜のルールである、符頭の位置が線と間の交互になっていることや、符頭が上にいくにつれて音高も高くなるということも覚えさせることができる。

どちらの教科書も、リズムの学習から始まり、音高については音楽の学習に慣れてきてから触れさせるようにしている。しかし、一般的に使われている五線や、4分音符・4分休符等の音符については、記載はされているが、そのものを学習するページはまだない。音楽の学習を始める1年生にとって、少しハードルが高くなってしまいう記譜の学習を、なるべく少なくし、簡単なルールから理解できるようにするためだと思われる。

2) 2年生

教育芸術社	教育出版
・「ロンドンばし」(高田三九三日本語詞・イギリスの遊び歌)「子犬のビンゴ」(志摩桂日本語詞・アメリカの遊び歌)で歌いながら遊ぶ(拍の定着) ・「はしの上で」(久野静夫日本語詞・フランス民謡)「トルコ行進曲」(ベートーベン作曲)に合わせ歌ったり手合わせしたりする(2拍子) ・「たぬきのたいこ」(阪田寛夫日本語詞・チェコ民謡・編曲者不明)「かっこう」(小林純一日本語詞・ドイツ民謡)「メヌエット」(ベツォルト作曲)に合わせ、手合せや歌唱、鍵盤ハーモニカの演奏をする(3拍子) ・蛙の様子を様々な声で表す(音高)	・「マンボナンバーファイブ」(プラード作曲)「とうしんドローイ」(沖縄県民謡)「ジュエッティンデデン」(トルコの音楽)「かめんぶとう会のワルツ」(ハチャトリヤン作曲)「ミッションインボッシブルのテーマ」(シフリン作曲)「ノクターンだい2番」(ショパン作曲)に合わせ身体表現する(拍・リズム) ・「こいぬのビンゴ」(志摩桂作詞・アメリカ民謡)で、拍に合わせて手拍子をする(拍・リズム) ・拍に合わせて動物や鳴き声を唱える(拍) ・「ぴよんぴよこロックンロール」(中田留美作詞・作曲)を歌う(2分音符・4分音符・8分音符・記譜)

・「かえるのがっしょう」(岡本敏明日本語詞・ドイツ民謡)を鍵盤ハーモニカで演奏したり歌詞や階名で歌ったりする(階名) ・階名唱を模唱する(階名、音高の定着) ・「この空とぼう」(海野洋司作詞・鹿谷美緒子作曲)をリズム譜を見てリズム伴奏する(4分音符・4分休符の定着・記譜) ・「いるかはざんぶらこ」(東龍男作詞・)若松正司作曲)で3拍子に乗ってリズム伴奏する(3拍子・記譜) ・「山のボルカ」(美龍明子日本語詞・チェコ民謡・飯沼信義編曲)を階名唱し、鍵盤で演奏し、リズム伴奏する(8分音符・8分休符) ・リズムづくりする(4分音符・8分音符・4分休符の定着・記譜) ・リズムを選んで組み合わせる(2分音符)	・リズムづくりする(全音符・2分音符・4分音符・8分音符・8分休符・4分休符・記譜) ・鍵盤を使って演奏する(階名・黒鍵の位置) ・「かえるのがっしょう」(岡本敏明作詞・ドイツ曲)「かっこう」(小林純一作詞・ドイツ民謡)「ドレミのトンネル」(佐野真裕作詞・作曲)を階名唱し、鍵盤ハーモニカで演奏する(階名・音高の定着) ・「朝のリズム」(吉田覚作詞・作曲・吉田和子補作)の休符部分を拍に合わせて手打ち等する(拍・リズム) ・太鼓やかけ声のリズムをつくる(拍・リズム)
---	---

2年生の導入も身体表現から始まる。教育芸術社は拍に合わせた手遊び歌が紹介されているが、2拍子や3拍子の学習にスムーズに移行させるためだと考えられる。一方、教育出版社は様々なジャンルの音楽を聴きながら、拍やリズムに乗る活動をさせる。音楽の世界を広げるためかと思われる。

楽譜の表示は明らかな違いがある。教育芸術社は、前半は1年生と同様、鍵盤ハーモニカの演奏をさせるための楽譜は3本の線の楽譜を使っている。指替えの必要のない曲(旋律が1点ハ～1点トの音域)を扱う際には楽譜が統一しており、児童も見やすいと考えられる。音符は符頭の中に階名が記されているもので、音価がわかるようなものは扱っていない。しかし、単純なリズム伴奏を打つ活動では、初めてリズム譜が扱われる。視覚的にも捉えやすい図形楽譜と、4分音符や4分休符を使って表したリズム譜を同じページに載せることで、実際の楽譜での表した方が理解しやすいと考えられる。8分音符や8分休符が混在したリズム譜も経験したのち、五線に表した楽譜を見ながら鍵盤ハーモニカの演奏をする、という活動に入る。しかし、楽譜に表す拍子の記号は、実際の記号を表示しているわけではなく、2拍子だということがわかりやすい「2」、4拍子がわかりやすい「4」とだけ表している。

教育出版は、教科書の前半から一般的な楽譜で記載されている。歌詞を歌うだけで音価がわかる歌唱曲で、全音符・2分音符・4分音符・8分音符・4分休符の全てを学習する。鍵盤ハーモニカを演奏する楽曲でも、1年生の教科書での3本の楽譜を使わず、さらに拍子も実際の楽譜と同じ表示の仕方をしている。早期から楽譜に慣れさせるためか、と考えられる。以上のような違いはあるが、どちらも音符や休符を実際にかくための欄もあ

り、記譜の仕方を学ばせられるようになっている。1年生に比べ、徐々に複雑なリズムを扱えるようになるにつれ、簡易楽譜では表せないリズムを記載するためでもあると考えられる。

3) 3年生

教育芸術社	教育出版
・「ドレミで歌おう」(小原光一作詞・作曲者不明)を階名唱し、鍵盤で演奏する(階名・ト音記号・五線・記譜・小節・縦線・終止線) ・「春の小川」(文部省唱歌・高野辰之作詞・岡野貞一作曲)を音の高さに気を付けて歌う(階名・音高) ・「海風きって」(高木あきこ作詞・石桁冬樹作曲)の後半部分を階名で歌い、鍵盤で演奏し、自分でも旋律づくりする(階名) ・リコーダーの導入(音価・付点2分音符) ・「とどけようこのゆめを」(安西薫作詞・長谷部匡俊作曲)を拍に乗って演奏する(4分の4拍子・付点4分音符) ・「ゆかいな木きん」(小林純一作詞・作曲者不明・原由多加編曲)を拍の流れに乗って演奏する(4分の2拍子) ・リズムづくりする(4分音符・8分音符) ・「あの雲のように」(美龍明子作詞・作曲者不明・飯沼信義編曲)を3拍子に乗りながら歌う(4分の3拍子・タイ) ・ラドレを使って旋律づくりし、太鼓でリズム伴奏する(階名・リズム・記譜)	・「キラキラおひさま」(日向有作詞・作曲)を階名唱し、鍵盤で演奏する(階名・ト音記号・五線・記譜・小節・縦線・終止線) ・「ドレミの歌」(ベギー葉山作詞・ロジャーズ作曲)をドレミで歌う(階名・音高) ・「茶つみ」(文部省唱歌)を手合わせしながら歌う(拍) ・リコーダーの導入(音価)「シシシでおはなし」(金子健治作詞・作曲)の歌詞やリコーダーで演奏する(リズム) ・「まほうのチャチャチャ」(和田崇作詞・ホリン作曲・和田崇編曲)をリズム伴奏する(拍・リズム) ・「十五夜さんのもちつき」(わらべうた)を拍に乗って手遊びする(拍) ・「陽気なかじや」(中地雅之作詞・オーストリア・ドイツ民謡・佐野真裕編曲)を手遊びしながら歌う(拍) ・「雪のおどり」(油井圭三作詞・チェコ・スロバキア民謡)や「マンガニ、雨とおどろう」(坪能由紀子作詞・編曲・アフリカ南部地方曲)のリズム伴奏をする(リズム)

3年生は、どちらも早い段階で五線やト音記号、小節などの楽譜の決まりを学習する箇所があり、指導要領の「ハ長調の楽譜を見たりして歌う技能」「ハ長調の楽譜を見たりして演奏する技能」を養うことにつなげている。また、ソプラノリコーダーを初めて扱う学年でもあり、リコーダーの技能と合わせて階名を覚えさせていく。低学年で扱う鍵盤ハーモニカの場合、卓奏用の吹き口を使うことで、児童が自分の指を見ながら演奏出来るため、鍵盤の右側に進むにつれて高い音、左側に進むにつれて低い音が出る、ということや、鍵盤の場所と階名を一致させることが比較的わかりやすい。しかし、リコーダーは口にくわえてしまうと自分の指を確認することが難しく、階名と運指を一致させることが容易ではない。そのため、どちらの教科書も、演奏のしやすいシからスタートし、左手の運指を変えるだけで演奏出来る短い曲(ソラシを使用した曲)を扱い、リコーダーと階名に慣れさ

せていくと考えられる。第2段階としてド（二点ハ音）とレ（二点ニ音）を扱った曲、さらに右手の運指が加わった曲（ファミレド）が掲載されている。

また、歌唱にせよ器楽にせよ、リズム伴奏の活動は引き続き行えるようになっている。楽器ごとに違うリズムを演奏し、重ねてアンサンブルできるような楽曲が増えている。さらにリズムを自分でつくって演奏したり、旋律をつくって演奏したりする活動も引き続き行えるようになっている。

その他、相違点が見つかった。教育芸術社は、2年生の器楽教材を楽譜で表す際、簡易な拍子記号を使っていたのに対し、3年生では一般的な拍子記号を扱っている。例えば4分の2拍子の曲を扱う際に、拍子記号の意味が学習できるような説明も掲載されていた。教育出版はもともと拍子記号を簡易に表すということはされておらず、また、拍子記号を取り出して学習する箇所はない。さらに、教育出版は手遊び歌の掲載が多く、拍に乗って遊ぶ活動が重視されているのがわかる。

4) 4年生

教育芸術社	教育出版
・「いいことありそう」（里乃塚玲央作詞・佐井孝彰作曲）を階名で歌う（長調の音階・付点8分音符・付点16分音符） ・「歌のにじ」（佐田和夫作詞・岡部栄彦作曲）の副旋律の一部をつくる（階名） ・「いろんな木の実」（中山知子日本語詞・西インド諸島民謡・加賀清孝編曲）のリズム伴奏をする（リズム・リピート記号） ・4文字の言葉を使ったリズムアンサンブルをつくる（音価） ・「風のメロディー」（平野祐香里作詞・鹿谷美緒子作曲）を伴奏に乗って歌う（8分の6拍子・強弱記号） ・「陽気な船長」（市川都市春作曲）「せいじゃの行進」（アメリカ民謡・長谷部匡俊編曲）を旋律の違いを捉えて演奏する（スタカート） ・「音のカーニバル」（美龍明子作詞・橋本祥路作曲）を拍に乗って演奏する（拍） ・「こきりこ」（富山県民謡・市川都市春編曲）をリズム伴奏する（リズム） ・ミソラドレを使って旋律づくりをする（階名・リズム・記譜）	・早口言葉のラップをつくる（リズム） ・「ブパボ」（おうち・やすゆき作詞・若松正司作曲）のリズムを確認する（付点8分音符・16分音符・シャープ・ナチュラル・タイ） ・「トルコ行進曲」（ベートーベン作曲）を拍に乗って指揮する（4分の2拍子） ・「ラバーズコンチェルト」（片桐和子訳詞・デニーランデル編作曲）、「メヌエット」（「アンナ・マグダレーナ・バッハの音楽帳」から）の指揮をする（4分の4拍子・4分の3拍子） ・「とんび」（葛原しげる作詞・梁田貞作曲）の強弱を考える（強弱記号） ・「もみじ」（文部省唱歌・高野辰之作詞・岡野貞一作曲・中野義見編曲）を歌う（全休符） ・お雛子のリズムを打ったり旋律を作ったりする（リズム・階名） ・「ソーラン節」（北海道民謡・きたかみじゅん編曲）をリズム伴奏する（リズム） ・「おどれサンバ」（中村佐和子作詞・ブラジル民謡）を演奏する（リピート記号） ・リズムを選んでアンサンブルをつくる（リズム） ・4つの音階を選んで旋律づくりをする（音階・階名・リズム）

4年生は強弱記号を確認する箇所がどちらもある。これは、それまでの積み重ねにより、表現方法の一つである強弱の工夫が子供たち自身でも行えるようになっていくことを想定しているからだと考えられる。また、強弱の「大きい・小さい」だけを変化させるのではなく、mfやcresc.などの表現も必要になってくるからではないか。

さらに、拍子記号についても詳しく学習させられる。教育芸術社は3年生から引き続いて8分の6拍子の学習ができる。教育出版では4分の2拍子の意味と指揮の仕方を学習した後、4分の4拍子や4分の3拍子も経験する。

リズムづくり・旋律づくりはどちらの教科書会社でも重視されているが、教育芸術社の方が段階を追ってつくれるような工夫がなされている。前の学年の経験を生かし、さらに複雑なリズムや旋律がつくれるような教材内容なので、教師の指導次第で子供の基礎能力を上げていけると考える。教育出版は、リズム伴奏に歌詞のようなものをつけ、言葉でもリズムを唱えられる経験を積むことにより、リズム感が養われていくと感じた。さらに、扱う楽曲はどの学年も世界の様々な民謡を取り入れており、多様な音楽に触れる手段としても使っていけるのだと考える。

5) 5年生

教育芸術社	教育出版
・「小さな約束」（佐井孝彰作曲）の短調の響きを感じ取って演奏する（短調の音階・長調と短調の違い） ・「リボンのおどり（ラバンバ）」（美龍明子日本語詞・メキシコ民謡・原由多加編曲）のパートの重ね方を工夫して演奏する（ヘ音記号・アクセント） ・リズムを選んでアンサンブルづくりをする（リズム） ・「静かにねむれ」（武井君子日本語詞・フォスター作曲・浦田健次郎編曲）の和音の響きの違いを感じ取りながら演奏する（長調の和音・1度の和音・4度の和音・5度の和音・5度の7の和音） ・同じ旋律に違う和音を付けたものを聴き比べる（旋律と和音の関係） ・「威風堂々第一番」（エルガー作曲・長谷部匡俊編曲）を演奏する（フラット・ナチュラル） ・日本の音階を使った旋律づくりをする（音階・階名・リズム）	・「クラップフレンズ」（高倉弘光作・構成）を強弱を変化させて演奏する（強弱記号・リズム・アクセント・速度記号） ・「茶色の小びん」（矢部実作詞・J・ウィンナー作曲・大畑みどり編曲）を低音の働きを感じ取って演奏する（ヘ音記号・繰り返し記号） ・「こきょうの人々」（勝承夫作詞・フォスター作曲・吉原順編曲）の和音の働きを感じ取って演奏する（ハ長調の音階・1度の和音・4度の和音・5度の和音・5度の7の和音） ・「星笛」（北村俊彦作曲）を歌うように演奏する（8分の6拍子・スラー・全休符） ・「こきりこ節」（富山県民謡・佐野真裕採譜・編曲）をリズム伴奏する（リズム） ・「谷茶前」（沖縄県民謡・小野一採譜・編曲）を三線や木琴等で伴奏したり、伴奏の旋律をつくったりする（リズム）

・日本の音階を使った旋律づくりをする（音階・階名・リズム） ・「失われた歌」（チャールズチルトン作曲・黒澤吉徳編曲）の旋律の美しさを味わって演奏する（スラー）	・「風とケーナのロマンス」（矢部実日本語詞・J. R. トーレス作曲・横沢源編曲）を拍に乗って演奏し、リズム伴奏する（拍子・リズム） ・インターロッキングの音楽をつくる（リズムの反復）
--	---

5年生はイ短調の音階の学習が新たに加わる。調のバリエーションが増えるため、様々な曲想の教材が増え、表現方法を工夫させる学習が深まる。さらに、合奏では低音部の働きを感じ取らせるための編曲や、和音の働きが理解できる教材が使われる。低音部でヘ音記号を学ばせ、歌唱では変声期を迎えた児童やこれから迎える児童に向けたメッセージも掲載される。児童の発達も考慮した内容となっていることがわかる。

6) 6年生

教育芸術社	教育出版
・「星空はいつも」（美龍明子作詞・浦田健次郎作曲）を曲想にふさわしい歌い方で歌う（速度記号） ・「ラバーズコンチェルト」（デニーランデル・サンダーリンザー作曲・石桁冬樹編曲）をパートの役割等を生かして合奏する（リズム・和音） ・自分でつくったリズムを使ってアンサンブルづくりをする（リズム） ・「星の世界」（川路柳虹日本語詞・今バース作曲・飯沼信義編曲）を和音の響きの移り変わりを感じ取りながら合唱する（和音） ・「雨のうた」（鹿谷美緒子作曲）を和音の響きの違いを感じ取りながら演奏する（短調の和音・イ短調・1度の和音・4度の和音・5度の和音・5度の7の和音） ・和音に含まれる音を使って旋律づくりをする（和音・階名・リズム） ・「ハンガリー舞曲第5番」（ブラームス作曲・シュメリング編曲）の指揮真似をする（拍子・拍・速度）	・ボディサウンドでリズムアンサンブルをする（リズム・音色） ・「ハンガリー舞曲第5番」（ブラームス作曲）の旋律・響き・速度を聴き取る（イ短調・ハ長調・音階・和音） ・「カノン」（バッヘルベル作曲・東山正流編曲）の旋律や重なりを聴き合って演奏する（和音・リズム・拍） ・「スワンダフル」（ガーシェイン作曲・柊ゆきえ編曲）をスウィングのリズムに乗って演奏する（リズム・拍の流れ） ・循環コードを使って音楽をつくる（和音・リズム・階名・音階・記譜） ・ドローンをもとに音を組み合わせて音楽をつくる（リズム・拍）

6年生はイ短調の和音が学習に加わっている。さらに幅広い教材を扱い、それまでの音楽経験を生かした学習を行うことができる。音楽の基礎的な知識や能力を高めるための教材というよりは、それらを生かして自分なりに表現方法を工夫して演奏する教材が増える。音楽づくりの内容では、基礎的な知識を確認する場としても有効であるし、知識を生かしてつくる経験もできる。

2.

以上のような考察から、学年の発達段階に合わせて理解させられるような表記の仕方や、学ばせる内容をどの順で掲載するか等、様々な工夫がされていることがわかる。教師はそれらのねらいをしっかりと把握した上で、授業を展開していくことが求められる。そのため、前後の題材の学習のつながりはもちろん、学年を通した学習のつながりも考えながら学習内容の構成を考える必要がある。

しかしながら、音楽の基礎的な知識や能力は、継続して積み重ねないと定着しない。教科書には様々な工夫は見受けられるし、教科書の楽曲にじっくり取り組み演奏技術を高めることは大切だ。しかし、ひとつの楽曲を扱っているだけでは、様々な音楽の基礎的な知識に触れることが出来ないし、別の楽曲では別の知識を獲得する、というように、知識を定着させることは難しい。

Ⅲ. 音楽的な基礎能力を養うための活動例

1.

上記を踏まえ、楽曲を扱うこととは別に、例えば常時活動等で音楽の基礎的な知識や能力を養うための教材を、毎回の授業で取り入れるべきである。小学校の授業時間は45分しかないため、短い時間で行える活動が望ましい。以下、筆者が現在行ったり考えたりしている活動・ドリル内容を記す。実際に千葉大学附属小学校の授業や「小学校音楽」の講義でも行い、児童の理解を深めたり学生に定着したりきいていると実感しているものもある。今後、児童用の活動として整理し、小学校でも実際に運用できるようにしていきたい。

① 音符の音価と書き方の確認

全音符の音価を2分割したら2分音符、さらに2分割したら4分音符、というように、音価の関係性がわかりやすい板書をし、さらに児童が書き込めるワークシートを使って一緒に音符を書いていく。音符の書き方も確認し、机間巡視で添削していく。

② 音符の音価のグラフづくり

上記の活動では音符の書き方を確認できるが、さらに音価がわかるようなグラフづくりをさせる。4分音符を1拍とした時のその他の音符の長さがどうなっているか、自分で作成することにより定着し、さらに視覚的にも捉えやすくなると考えられる。

③ フラッシュカード（音符・休符）

音符・休符がひとつずつ書かれたカードを掲示し、瞬時に名称を言わせる。音価も同様に言わせる。なるべく早く言わせたり、リズムボックスに乗って言わせたりとバリエーションをつけることで、何度も飽きずにやらせることができる。

④ フラッシュカード（音名）

ト音記号とヘ音記号の隣にひとつの音を表示し、音名を言わせる。フラッシュカード（音符・休符）と同様に、なるべく早く言わせたり、リズムボックスに乗って言わせたりする。また、音楽室から退室する際、一人一問答えさせる、という活動もできる。

③フラッシュカード（リズム）

まずは拍を一定の速さで打てるような練習をさせる。メトロノームに合わせ、机を指や鉛筆で打たせる。その際に、メトロノームの音と自分で打つ音が重なるように気を付けさせる。指や鉛筆の動きは、打った後にボールが跳ね返ってくるように、リズムよく打てるようにさせる。

リズムボックスに合わせ、カードに表示されたリズム（4分の4拍子1小節分）を手打ちさせる。リズムの難易度は徐々に上げる。最初は4分音符と2分音符だけのもの、次に4分休符を加えたもの、8分休符を扱ったもの、というように組み合わせを工夫する。拍の頭がタイになっているものや、8分休符等になっているリズムは難易度が上がるので、拍が内面化されたリズムは徐々に扱うようにする。

④ ドレミカード

グループで行うゲームに使う。フラッシュカード（音名）と同じ表示がされたカードを、一点ハから二点ハまでそれぞれ用意する。8枚のカードをバラバラに並べ、教師が読み上げる音名のカードを取る。多くのカードを獲得した人が勝ち、というルールで行う。ゲーム感覚で遊びながら音名を覚えられるメリットがある。読譜力に差のある児童同士が同じグループになることが多いと考えられるので、ハンデとして、音楽経験のある児童は5秒待つ、等のルールを作る必要はある。また、その日の学習内容で覚えさせたい音名（リコーダーで扱う音を含める等）を取り入れたり、並べるカードの枚数を少なくしたりすることで、難易度を柔軟に変えて扱うことができる。

⑤ クラッピングミュージック

手拍子で演奏する。リズム譜を扱うので、音高を読むのが苦手でも、リズムだけに集中して読譜することができる。拍に乗って演奏することで拍節感を養うことができる。難易度を様々設定し、段階を追ってリズム感を養っていく。まずは手拍子、慣れてきたら手打ちと足踏み、または右手と左手で、それぞれ違うリズムを打つ。

⑥ リズム聴音

リズムを記譜させる。4分の2拍子2小節の簡単なリズムからスタートし、徐々に慣れてきた際に4小節に増やしたり、4分の4拍子に変えたりする。

2.

①、②、④の活動に関しては、附属小学校でも行ってきた。この活動を行う前後で明らかな違いが表れた。以下、授業前と授業後の結果を示す。

1) 2年（授業前・授業後共に33人）

i. 音符の名称を答える質問

音符の名称	授業前正答	授業後正答
4分音符	15人 (45.5%)	31人 (93.9%)
2分音符	8人 (24.2%)	33人 (100%)
8分音符	10人 (30.3%)	33人 (100%)

その他、授業後に質問した8分休符は28人 (84.8%)、4分休符27人 (81.9%)、全音符23人 (69.7%) が正答した。

ii. 階名を記入する設問

授業前正答	授業後正答
23人 (69.7%)	26人 (78.8%)

2) 3年（授業前34人・授業後35人）

i. 音符の名称を答える質問

音符の名称	授業前正答	授業後正答
2分音符	18人 (52.9%)	33人 (94.3%)
8分音符	18人 (52.9%)	33人 (94.3%)

その他、授業後に質問した8分休符は33人 (94.3%)、4分休符34人 (97.1%)、全音符35人 (100%)、付点2分音符33人 (94.3%) が正答した。

ii. 階名を記入する質問

授業前正答	授業後正答
19人 (55.9%)	26人 (74.3%)

3) 6年（授業前・授業後共に34人）

i. 音符の名称を答える質問

音符の名称	授業前正答	授業後正答
8分休符	12人 (35.3%)	22人 (64.7%)
4分休符	15人 (44.1%)	29人 (85.3%)

その他、授業後に質問した付点4分音符は32人 (94.1%)、16分音符33人 (97.1%)、全音符33人 (97.1%)、全休符27人 (79.4%) が正答した。

ii. 階名を記入する質問

授業前正答	授業後正答
21人 (61.8%)	24人 (70.6%)

2年、3年、6年のあるクラスを対象に授業を行った。授業前は、i. は音符の種類を少なくし、名称を答える、ii. はすでに授業で学習しているであろう楽曲の旋律を階名で答える、というような簡単な試験を実施した。授業後は、授業の内容の定着を図るため、授業前よりもi. での音符の種類を多くしたり、付点音符を取り入れたりした。ii. についても筆者が作曲した旋律を階名で答えさせる試験とした。

i. の、音符の名称については、多くの児童が正答を答えることができていた。授業では何度も唱えさせたり、書かせたりしたためだと思われる。しかし、2年の全音符や6年の8分休符は、そもそもあまり触れる機会のない音符であったり、形が複雑だったりするために、正答率が低くなっていると考えられる。そのような音符や休符は、楽曲で現れた際に指導したり、フラッシュカード等で何度も見せたりすることで、定着を図っていきたい。

ii. の階名を記入する質問では、授業後の旋律が複雑だということもあり、正答率は大幅な上昇はなかった。やはり音名や階名に関しては、長期にわたって指導して

いく必要性があると考えられる。その中でも、3年生の正答率の上昇は比較的大きい。これは、3年生が音楽室から退室する際、④のフラッシュカード（音名）を答えさせる、という活動を行ったからかと推測される。短い時間でもいいので、何度も触れさせるということが重要であることがわかる。

しかし、これらの活動だけでは、ただ名称がわかる、ただ音名がわかる、という知識が獲得されている状態である。これらの知識を活用させ、表現技能に生かしたり、表現の工夫を考えたりすることが出来るようにしなければ

ならない。児童の美しい音楽表現に向け、さらなるカリキュラム開発をしていきたいと考える。

参考書目

文部科学省 編『小学校学習指導要領解説 音楽編』教育芸術社 平成29年

小原光一 他著『小学生の音楽1～6』教育芸術社 平成27年

新実徳英 他著『音楽のおくりもの1～6』教育出版 平成27年